

後戸の神について

後戸《うしろど》…仏堂の背後の入口のこと。この入口は本尊の背後にあることから宗教的な意味をもち、後戸を入った正面に本尊の護法神やより根源的な神仏を安置する。例えば東大寺法華堂の執金剛神、二月堂の小観音（こかんのん）、常行堂の摩多羅神（まだらしん）などがその典型。

法会儀礼のなかで後戸の神をまつる呪法は芸能化し〈後戸の猿楽〉という呼称が示すように中世芸能誕生の舞台となった。能楽の翁を後戸の神（宿神・守宮神）といい修正会（しゅしょうえ）などの延年に登場するが、古来、修正会に後戸から鬼が出現するのもまた普遍的であり、ともに後戸の宗教性を象徴している。

「改訂新版 世界大百科事典」

仏在所（天竺）において須達長者が祇園精舎を建立する。その供養に釈迦如来が説法をなさった。この時、釈迦をねたむ提婆（提婆達多）が一万人の外道を引き連れ、幣をつけた木の枝・笹の葉を振り回させ、踊り叫んで説法の妨害をしはじめる。釈迦は傍らの舍利弗に目くばせをし、仏力を与えた。この力により寺の後戸にて鼓・鉦鼓をととのえ、阿難の才覚と舍利佛の知恵、富樓那の弁舌を合わせ六十六番の物真似を演じて見せたのだ。外道たちは、笛・鼓の音に後戸に集まり、この演技に見入って静まった。

世阿弥「風姿花伝」



（輪王寺蔵「摩多羅神二童子図」）

「摩多羅神《またらしん》の曼荼羅」と呼ばれた神像図。そこには唐風の幞頭《ぼくとう》に日本風の狩衣を纏い、鼓を打つ姿の摩多羅神を中央に、右の手に笹の葉、左の手に茗荷《みょうが》を持った二童子が左右に配されており、上方には北斗七星が描いてあった。…さて摩多羅神は猿楽の鼓打ちに似た格好をし、二童子も笹と茗荷を持って舞う姿をとることから、そこに歌舞に関わる神、芸能神としての性格を窺うことができよう。事実この神を本尊として、中世—近世には天台寺院で修正会《しゅしょうえ》の際に延年の舞いや猿楽などが演じられている。…だが摩多羅神は最初から芸能神であったわけではない。

山本ひろ子「異神Ⅰ」